

1944年、沖縄は首里で、
出会うはずのない者たちが出会った

そして1945年—

作 杉浦久幸
演出 黒岩 亮

美術 柴田秀子
照明 桜井真澄
音響 高橋 巖
衣裳 首藤 美恵
舞台監督 鳴海宏明
制作 中山博実

佐々木愛
阿部勉
米山実
沖永正志
白幡大介
春稀貴裕
高橋未央
皆川和彦
藤原章寛
筆内政敏
山崎麻里
斉藤直樹
長束直子(声)

銀の滴 降る降る まわりに

—首里1945—



第294回 旭川市民劇場12月例会
2016年

12月13日(火)6:30

14日(水)1:30

上演時間
2時間30分
(休憩15分)

会場
旭川市公会堂

●入会金	2,000円
●会費(月)	一般:2,500円
	大学生:1,000円
	高校生以下:500円

会員になると年6回の演劇を鑑賞できます。
住所:旭川市3条通8丁目緑橋ビル1号館2F
HP=<http://potato10.hokkai.net/~a-enkan/>
TEL: 23-1655

銀の滴 降る降る まわりに -首里1945-

～「銀の滴 降る降る まわりに」～
知里幸恵氏編訳による『アイヌ神謡集』中に、
<泉(フクロウ)の神の自ら歌った謡>として
「銀の滴 降る降る まわりに
金の滴 降る降る まわりに」と出てくる。

軍属として炊事兵となった、銃を持たない人間たちの沖縄戦。
アイヌや沖縄の人間も含めて構成された日本の兵士たち。
それぞれに偏見を抱え、いがみ合い、喧嘩しながら食料を調達し、調理が始まる。
足りない食糧、激しくなる米軍の攻撃。
いつまでもいがみ合っているのは生き残れない。
嫌でも手を組むしかないのだ。
ぎこちなく差し出された手と手が、やがて……

戦後、沖縄の激戦地跡に建てられた一基の慰霊塔。「南北之塔」と名付けられたその塔の側面にはアイヌ語で「キムウタリ(山の同胞)」と刻まれました。
アイヌと沖縄。それぞれが歴史の流れに翻弄され、差別されてきました。
そんな日本の最北と最南の民が戦争という極限状況の中で図らずも出会います。
沖縄は戦場となり、アイヌは「日本軍」の盾として戦場に送り込まれたのです。

Staff & Cast

作 杉浦久幸 演出 黒岩 亮

美術 柴田秀子 照明 桜井真澄 音響 高橋 巖 衣裳 首藤美恵 舞台監督 鳴海宏明 制作 中山博実



佐々木 愛



阿部 勉



米山 実



沖永 正志



白幡 大介



春稀 貴裕



高橋 未央



皆川 和彦



藤原 章寛



筆内 政敏



斉藤 直樹



山崎 麻里



長東 直子(声)

Impressions

・ぎりぎりの精神状態の中でも他人の事を思いやれる懐の深い沖縄のおじやおばあ、小隊長の優しさ、
厳しい生活の中での救いでした。そしてこの役を見事に演じていた愛さんをはじめとする役者さん、
沖縄とアイヌの人たちが抱えていた人種差別、どの部分を切り取っても深く心に残る作品でした。

・大変良い作品でした。二等国民といわれ、差別されたアイヌ人と沖縄人。
同じ日本軍の中に差別があったという事実を知りました。
戦争をテーマにした作品はいくつも見ましたが、心に残る作品です。
たくさんの尊い命を犠牲にして得た、今の平和な日本が、これからも続くように願ってやみません。

・観終わって「難しい主題をよくも上手に構成したものだ」とまず思った。
それは、悲惨な戦場、しかし、そこにも存在した差別、迫り来る危機の中での土地の人々の暖かい人情、
これらが実に緻密な織物を見るように演出されていたからである。
今は六十余年前の戦争を知らない人も多くなりつつある。
そしてアイヌの人、沖縄の人々に対する差別のあったことも。
しかし、いわゆる「差別」は今もいろいろな形である。それも反省しなければならない。
戦争の悲惨さを知ることと同時に。(女性)

・すばらしい舞台でした。人間の弱さ、みにくさ、そして優しさ、いろいろな事が胸にぐっときました。
(50代・女性)

・歴史をひもとけば、あるいはそうまでしなくても、知識としては承知している沖縄とアイヌの人々の、
過去形にはできないつらい歴史。
その事実を、異なる言葉の遭遇を通して描いたこの舞台を観て、
安易に「日本」とくくるわけにはいかない、重い歴史の背景を再認識しました。
最後に飛ばそうとした竹とんぼ、それぞれの登場人物の叶えられなかった願いの象徴のようで、切ない幕切れでした。
(60代 女性)